

し・り・べ・つ

歴史余話

第10回 史書について

新当別町史編集

伊藤 哲也

自治体史や団体史、産業史などの編集に携わることが多いため、時々「史書とは何か」を考えることがあります。歴史を記した書物のことですが、では何のために歴史を記すのでしょうか。考え方はいろいろとあるでしょうが、私が思い出すのは、「白雪姫」の母親。あの「鏡よ鏡、世界で一番美しいのは誰?」と問いかける女性です(こういうタイプは、もちろん男性にもいます)。この母親は「それはあなたです」と、鏡に答えてもらわないと、気が済みません。

史書はいわば鏡のようなもの。そこに映った顔が美しくないからと言って、鏡のせいではありません。年を取り、しわが増え、白髪が目立つようになったとしても、それは自分の姿なのです。気に入らなくても、「これが私だ」と認めることは不可欠です。もし認めないと、他人との認識の食い違いがはなはだしくなり、「私って美人よね」「うーむ、いや…」「何よ! どうせ私のことを嫌いなんでしょ」などという具合に、けんかや物笑いの種になりかねません。何よりも、ありのままの自分を見ないと、自分をよくする、向上するということができなくなるでしょう。

でも、私たちは白雪姫の母親同様、どうしても自分を美化しがりますし、常にある程度は美化してもいます。史書はそうした人間の性向を自覚し、抑制し、史料や事実に基づいて自分の姿=歴史を客観的に書くという行為の結果、生まれるものです。したがって、史書の持つ重要な意義の一つは、過去を客観視することだと

思っています。

シンプルな答えのようですが、客観視のためには深い思考や多様な視点が求められ、簡単なことではありません。しかしそれゆえ、顔のしわが時に味のあるものにもなるように、過去の事実の評価もまた変わることがあり得ます。歴史を記すという行為の奥深さは、そうしたところにあるのかもしれませんが。

新しい当別町史の編集にあたっては、そうした歴史意識をしっかりと持って先人の姿を伝えられればと考えています。それこそが未来への指針になるはずですから。

「史」

解字 史

会意。古い形で見ると、中と又を合わせた字。上は中、下は手を表す。中は、中正で、左右にかたよらないこと。手は、持つことである。記録をつかさどる官吏は、中正を守って書かなければならない。それで、史は書記の官吏をさし、また、記録をいう。一説に、中は竹札で、史官が竹札を手に持っている形とも、竹札を読み数える人仕事をする人とも解する。

小林信明編『新選漢和辞典 第六版』
(小学館、2000)より、一部略

実証事業に取り組んでいる木屋路さんと齊藤さんにお話をお聞きしました

自動かん水システム

ユリの栽培では、適切なかん水(水やり)が重要です。この自動かん水システムでは、時間や土壌水分率を設定して、かん水作業を自動化し、適切な水分量を維持します。



かん水の時間や土壌水分量を設定



花の根元にかん水します

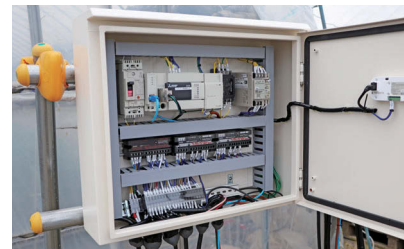
環境モニタリング装置

花き栽培のマニュアル化のためには、客観的なデータの蓄積が必要です。この装置で蓄積されたデータを関係者で共有し、効率的に栽培するためのマニュアルづくりに活かされます。

数値化されたマニュアルを基に栽培することで、新規就農者でも高品質の花きが栽培できることを目指します。



温度、日射量、土壌水分などを測定



測定したデータはWEB上にアップ



カメラで定時撮影して成育を記録



データはスマホなどで随時確認可能



木屋路 尚史さん

当別町出身の47歳。町内有数のユリの出荷量を誇る若葉地区の農家の5代目。平成27年から当別花卉生産組合の理事と、ユリ部会長、チューリップ部会長を務める。

花きの品質は温度管理が重要なため、データやシステムを活用して、効率的に高品質の花を生産できると良いと思います。

また、花き生産は手作業が多いので、かん水作業が自動化されると、その時間を他の作業に充てることができるので、とても助かります。

齊藤 義也さん

岩見沢市出身の38歳。弁華別地区で新規就農し7年目。令和2年から当別花卉生産組合の副組合長を務める。



就農した始めの頃は、水分量の管理が難しく、自分のやり方が正しいかわからず、何度も土を掘って確認していました。

基準の水分量がマニュアル化され、センサーで水分量の数値が確認できたら、花き栽培を新たに始める方も安心して作業ができると思います。